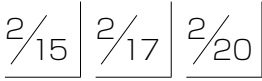


楽 曲 紹 介

解説=野本由紀夫



マーラー (1860-1911)

交響曲第9番 二長調

グスタフ・マーラーが死の前年の1910年に完成させた、最後の交響曲。作曲順に『大地の歌』、この第9番、未完成に終わった第10番をあわせて、「告別三部作」と呼ばれる。三作はたがいに主題メロディが似ているだけでなく、「別離、死、浄化(変容)」という共通のプログラムも含んでいる。

悲劇のはじまり

1907年、悲劇のはじまった。同年1月、ウィーン各紙はウィーン宮廷歌劇場総監督マーラーの批判をいっせいに書きたてはじめた。マーラーは転職を真剣に考え、6月21日、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場と、秘密裏に正式契約を取り交わした。

その直後、7月12日、溺愛していた長女マリアが、猩紅熱(しょうこうねつ)とジフテリアの合併症により5歳たらずで急逝。妻アルマに「縁起でもないからやめて」と懇願されたにもかかわらず、『亡き子をしのぶ歌』(1901-1904)を作曲したことを、思い悩むようになる(このことが第9番の最終楽章の伏線となる)。

まもなく、彼自身にも重篤な心臓病が発見された。こうした状況下で、マーラーは宮廷歌劇場の監督の辞任を願い出て、ウィーンを去ることになった。

第9番の作曲と「死」

交響曲第9番は、1909年6月に作曲がはじめられ、翌年4月1日に完成した。

精神分析的にあって、もともとマーラーに「死への期待」「破滅願望」があったことは事実であろう。それは第6番『悲劇的』の英雄を倒すハンマーなどにも見てとれる。しかし、愛娘の急死と自身の心臓病は、「死」をもっと身に迫った問題とし

て突きつけたと思われる。

第9番完成後、妻アルマ(1879-1964)と建築家グロピウス(1883-1969、のちのバウハウスの創立者)との不倫が発覚。アルマとの関係が急速に悪化すると、マーラーはうつ状態となり、精神分析医フロイトの診察を受けた(今日風にいうと、精神カウンセリング)。

ストレスが心臓に良いわけがない。心臓の治療も受けたが、1911年5月18日、ウィーンでマーラーは帰らぬ人となった。

第1楽章 演奏に30分近くかかる、巨大な楽章。指揮者ヴィレム・メンゲルベルク(1871-1951)はこの楽章を「彼の最愛の人々への別れ(妻や子供——この上なく深い悲しみに満ちた)」ととらえ、バーンスタイン(1918-1990)は「優しさ、情熱、そして人間を愛することへの別れ」と解釈していた。

冒頭からいきなり提示される「タータ、ンター」というリズム(チェロとホルン)は、バーンスタインが「不整脈」と呼んだ。第7小節から第2ヴァイオリンで**主要主題**が奏されるが、その出だしの「ファゝミー | ファゝミー」という旋律は、『大地の歌』の終曲「告別」において「永遠に!(ewig)」という歌詞が付いていた。

この楽章は、何度も寄せては返す、「生と死」をめぐる激しい闘いであるかのようだ。20分ほど(第314小節)で、「不整脈リズム」がトロンボーンの**fff**(最強音)で「最高度に暴力的に」(楽譜の指示)奏される。主人公は「死を宣告」されたのだ。

最後は、あたかも心臓が停止する直前に大きく鼓動するかのように、「永遠主題」が何度も繰り返されて、消えてゆく。

第2楽章 大きく3つの部分と結尾(コーダ)からなる3拍子の楽章。メンゲルベルクは「死の舞踏」と解釈しているが、ユーモアにあふれた楽章である。

第3楽章 **ロンド・ブルレスケ** 楽譜には「きわめて反抗的に」と表情指示が書き込まれ、パロディや風刺画的な皮肉に満ちた音楽。メンゲルベルクは「最後のユーモア——創作、創造、すべては死から逃れるためのむなしい努力」ととらえている。

第4楽章 アダージョ 最終楽章は、生への執着を示す ff (最強音)の音楽[A]と、それとは対極にある pp (最弱音)の瞑想的な部分[B]が交互に現れる。バーンスタインはこのB部分のことを「禅の境地」、「幽体離脱の試み」などと表現している。

この楽章で、作曲者はすぐには「無の境地」に達することはできず、激しい生への執着が三度(みたび)襲う。しかし、それもついに力尽き、死を穏やかに受け入れていく。

恐るべき pp で満たされた、弦楽器群だけによる**最後の5分間**、第1ヴァイオリンが奏しているのは、『亡き子をしのぶ歌』の第4曲の最後の部分である。この歌曲の作曲後に、長女マリアは5歳足らずで亡くなった。第9番を書いていたとき、マーラーはその悲しみから脱しきれていなかった。

マーラーがこの交響曲で最終的に到達した「死」を容認する境地とは、「あきらめ」だったのだろうか。それとも、禅宗でいう「悟りの境地」だったのだろうか。まさに全曲の最後の小節に、マーラーは次のような発想記号を書き入れている。「**ersterbend (エアシュテルベント) ——死にゆくように**」。その後訪れる、吸い込まれそうなほどの深い沈黙。死は「終わり」ではない。未来へと続く「永遠の時間」のはじまりでもあるのだ。

【作曲年代】 1909年6月から南チロルのトブラッハ(現ドビアゴ)で作曲がはじめられ、1910年4月1日に完成。

【初演】 作曲者の没後1年を経過した1912年6月26日に、ブルーノ・ワルター(1876-1962)指揮するウィーン・フィルの演奏により、ウィーンで行われた。

【楽器編成】 ピッコロ、フルート4、オーボエ4(イングリッシュ・ホルン持ち替え)、クラリネット3、エス[E♭]・クラリネット、バス・クラリネット、ファゴット4(コントラファゴット持ち替え)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ2名、打楽器(大太鼓、小太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム、グロッケンシュピール、低音の鐘3)、ハープ、弦楽5部

のもとゆきお(音楽学)／桐朋学園大学助教授を経て、玉川大学芸術学部教授(音楽史、鑑賞理論、指揮法)。NHKテレビ「名曲探偵アマデウス」「ららら♪クラシック」の監修・解説者、Eテレ学校番組「おんがくブラボー」番組委員。昨年末、1000人の第九をパシフィコ横浜で2回指揮。